

## 尾張北部の旧丹羽郡の学校史(2)

— 江南市・扶桑町・大口町の寺子屋から小学校設立へ —

*School History of Old NIWA District in NORTH-OWARI (2)*

— From Temple School to Elementary School in KONAN, FUSO and OGUCHI —

木全 清博 KIMATA Kiyohiro

(人間発達学部)

### はじめに

尾張北部の寺子屋の開業・設立と束脩<sup>そくしゅう</sup>(入学料)・謝儀<sup>しゃぎ</sup>(授業料)の金納率の高さに注目して、幕末期から明治初年の学校史を検討してきている。尾張北部地域のうち、前年度に岩倉市(旧丹羽郡)と北名古屋市(旧春日井郡)の寺子屋をまとめて<sup>1)</sup>、今年度に旧丹陽村・旧西成村(旧丹羽郡、現一宮市)の寺子屋と私塾有隣舎の教育をまとめた<sup>2)</sup>。本稿では、江南市・扶桑町・大口町の寺子屋から小学校への変遷の学校史を取りあげていく。

寺子屋の束脩・謝儀の重要性に注目したのは、故丹羽健夫(前河合文化教育研究所長)であった。『愛知の寺子屋』(2012年)<sup>3)</sup>を読んだ私は、2018年7月13日に氏を訪ねた。矢継ぎ早の質問に穏やかに答えられ適切な助言をいただき、帰り際に同著の原資料700枚の複写物を「返すのはいつでも良い」と言われてお借りできた。この日の丹羽氏との対話が、尾張北部地域に焦点化して寺子屋研究を進める契機となった。岩倉市及び北名古屋市の寺子屋研究をまとめた論文を送ったのは、2019年4月12日だった。ところが、その3日前の4月9日に急逝されていたことを知らされた。読んでいただき忌憚のないご批評を受けたかった。研究の遅れをおわびするとともに、ここで氏の学恩に感謝申し上げたい。

丹羽氏は、尾張地方の金納率の高さが「丹羽郡76.4%、海部郡71.9%、中島郡62.5%、葉栗郡60%」で、農民たちの商品作物の栽培と普及に関わっていると指摘した<sup>4)</sup>。18世紀半ば頃より一宮の三八市はじめ岩倉・小折・古知野の在郷市が開市され商業的な流通経済が展開しており、この地域の農民の間に貨幣の蓄積がなされて、読み書き算への教育要求が強まっていたのである。尾張北部・西部の寺子屋開業が幕末の天保・弘化・嘉永・安政期(1830～59年)の約30年間に集中しており、この時期に岩倉市・北名古屋市一帯は一宮の三八市に出す木綿栽培・綿糸・綿織物の綿作地帯となっていた。

本稿で扱うのは、これより北部地域の江南市・扶桑町・大口町で、桑の栽培から蚕の繭、生糸、絹織業の養蚕地帯の寺子屋である。尾張では江戸時代の文化期(1804～18年)には、城下町名古屋に供給する枇杷島市の青物(野菜)地帯、その北部の綿作地帯、さらに北部の養蚕地帯での地域的分業が成立していた<sup>5)</sup>。岩倉・師勝・西春などの綿作栽培は、外国綿の輸入により明治の半ばまでには衰滅していった。一方、養蚕地帯では明治から大

正期に隆盛して、昭和戦前期から戦後まで続き、地域的景観であった一面の桑畑は、高度経済成長期の1960年代まではほぼ変わらなかった。『郷土宮田』（1959年）という郷土読本に、次のような文章がある<sup>6)</sup>。

「名古屋から名鉄電車の犬山線に乗ってくると岩倉あたりまでは窓の外は水田と野菜畑が目につきますが、布袋をすぎて古知野にかかるころから桑畑が目についてきます。つぎの柏森から扶桑にかかるころは両側とも桑畑の多いことにおどろいてしまいます。このことから推察できるように現在では桑畑すなわち養蚕業を尾張においては木曾川の上流部に集まってしまっていて、しかもこの上流部は日本における養蚕業の三大密集地帯の一つでもあります」。続けて、昭和30年度では江南市、犬山市、丹羽郡、葉栗郡でとれたまゆの量が約36万kgで、愛知県県中の約4分の1を生産している、と書いている。

江南市東野にある私立学校に通って少年時代の中学・高校の6年間を送ったが、1960年代前半にはまだ、学校への通学路には一面の桑畑が多く残っていた。桑畑に入りこんで友人と遊びに夢中になり、学校には養蚕室があり隠れ場所にして遊んだ体験を持っている。

## 1 尾張北部地域における幕末期の養蚕業の展開

### (1) 江南市（旧丹羽郡・旧葉栗郡）の蚕糸業

尾張北部の近世の養蚕地帯の蚕糸業の始まりは、19世紀に入った頃と見るべきである、と『江南市史』本文編は説明している。『尾張名所図会』<sup>7)</sup>の記載や宮田村三輪家文書に基づき、従来は1682（天和2）年説や天和年間の蚕種販売説を蚕糸業の始まりとしてきたが、信州上田市立博物館など上田市での資料で裏づけられないとして19世紀初期説を打ち出した<sup>8)</sup>。江南市域では養蚕業（培桑・蚕種・蚕飼・繭）、製糸業、絹織業の3つのうち、養蚕業と製糸業が中心となっていた。扶桑町も同じく絹織業の普及はあまりみられず、前2者の蚕糸業が中心であった。尾張北部の養蚕業は絹織業のような製品加工よりも、桑から蚕種までや生糸生産までであった。

樋口好古『尾張徇行記』1822（文政5）年には、尾張北部の村々の養蚕業のようすが克明に記されている<sup>9)</sup>。この地域は地形上の特質として木曾川の扇状地で、砂地が多く畑作中心の村々が多かったので、早くから換金作物の栽培と農業の副業化が普及しており、茶や桑を植え、蚕から繭を生産して、村によっては製糸・織物まで行くところもあった。養蚕に関わる村は30ヶ村にも達するが、村によって様々な養蚕業の形態があった。

『尾張徇行記』によれば江南市域の主な村々の養蚕業は、次のように多様であった。古知野村は「商家アリテ此辺ニテ賑ハシキ所ナリ、畠毛ハカリノ所ニテ一面砂地ナリ、茶桑ヲ多ク植、其間ニハ荏大豆ヲ多ク作レリ、又農業ノ余力ニハ家毎ニ蚕養ヲシ、生産ノ授ケトセリ」、高屋村は「農業ノ余力ニハ蚕養ヲシ、繭ヲ製シ他方ヘウリ出セリ」、東野村は「農商ヲ兼タル村邑故ニ富饒ノ地ナリ、又蚕養ヲスル家モアリテ、糸ヲ製シ、処々ヘウリ出セリ」、宮後村は「本田ハ畠毛ハカリノ所ニテ、荏大豆専ラ作レリ、又農業ノ余力ニハ

菅大臣<sup>かんだいじん</sup>縞<sup>しま</sup>ヲ織出シ生産ノ授ケトスル者モアリ、小折村は「商売<sup>こおり</sup>ヲ生産トスル者多クアリ、酒店<sup>みそ</sup>味噌屋<sup>こんや</sup>油屋<sup>こんや</sup>紺屋、其外ニ素麵<sup>そうめん</sup>ナトヲ製シ交易<sup>はんじょう</sup>繁昌ノ地ニシテ富戸多シ」で「享保十六亥年（1731年）より六斎市御免」とあり、五明村は「農業ノ余力ニ蚕飼<sup>ごみょう</sup>ヲ生産トス、是繭ヲツクリ地方ニ売出スト也」、などと書かれている<sup>10</sup>。

『尾張徇行記』には葉栗郡が欠落しているので、葉栗郡の村の詳細は不明である。だが、『尾張名所図会』葉栗郡の説明で「当郡及丹羽郡の村民、昔より村毎に蚕を飼う事夥しく、多くは此の業をもって貢の代とす。随<sup>したが</sup>って田圃<sup>でんぼ</sup>に桑を植うる事諸村に多し」としている。1864（文久4）年の宮田村生原地区は400数戸の内、繭を売却したのが28戸、糸引き家が3戸あったとする<sup>11</sup>。

上記の村の石高<sup>ならしだか</sup>（概高）、戸数、人口を示すと、次のようである<sup>12</sup>。古知野村—18石6斗8升8合、150戸、686人、高屋村—30石6斗9升5合、134戸、515人、東野村—26石9斗1合、204戸、790人、宮後村—22石2斗7升6合、117戸、427人、小折村—10石7斗8升3合、402戸、1625人、五明村—21石5斗9升、120戸、493人。

宮田村の製糸業のようすを地域資料から知ることが出来る。釜屋<sup>かまや</sup>とよばれる蛹<sup>さなぎ</sup>を買い集めて糸に引く専門の業者が存在しており、1846（弘化3）年に釜屋が28軒いた。1850（嘉永3）年に8軒まで減少して、1865（慶応元）年に18軒へと回復した。しかし、宮田村では農業の片手間に糸を引いたので技術的にレベルが高くなかったようで、利益も少なかった。したがって、生糸にするより繭のまま他所の商人に売る方が多かった。

『尾張名所図会』に養蚕業の生産の展開に関わる挿絵がある。図1 宮田天王社と図2 宮田村及び近村養蚕勉励略図と製糸の図である<sup>13</sup>。図1 上段に、鎌倉時代の歌人藤原光俊（1203～76）の「みのをはり（美濃尾張） さかいつづきにうえなえて よむともつきじ

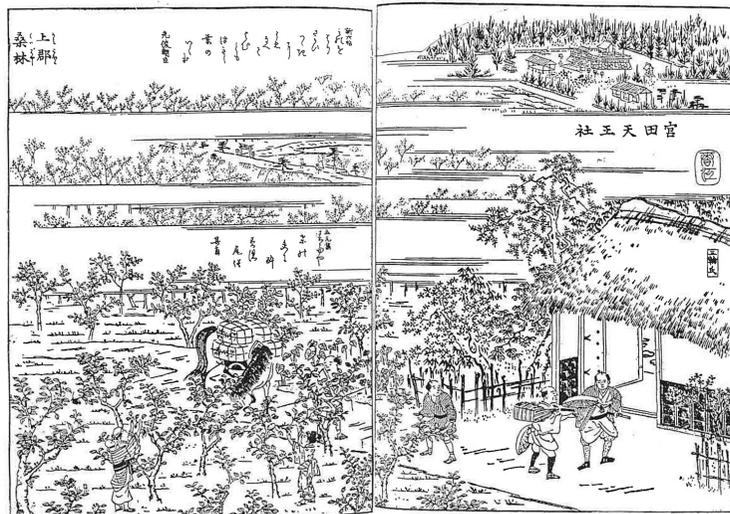


図1 桑畑

（『尾張名所図会』巻5 天保12年）



図2 養蚕勉勵図と製糸の図  
 (『尾張名所図会』巻5 天保12年)

桑のいくもと」と江戸時代の蕉門の宝井其角(たからいきかく) (1661~1706)の俳句「春雨や 桑の香にほう 美濃尾張」が書かれている。図2の製糸の図には、「手挽製糸」「手曳製糸」(繭を煮て蛹を殺し、手で糸を曳く方法)が描かれている。

(2) 扶桑町・大口村の養蚕農業の展開

『尾張徇行記』の扶桑町・大口町の主な村々を見ていく。柏森村は「薄地故二畑一面二茶桑多シ(中略)、桑ノ葉ハ上有知村アタリへ多ク売ツカハスト也」(上有知村=現岐阜県美濃加茂市)、齊藤村は「農務ノ余力ニハ蚕養ヲシ、糸真綿ヲ製シ、他方ニウリ出シ生産ノ授ケトス」、高木村は「農務ノ余力ニハ蚕養ヲシ、糸真綿ヲ製シ、処々ニウリ出セリ」とあり、南山名村は齊藤村と同一の記述である。北山名村は「蚕ヲ養ヒ糸綿ヲ製シ、他方ニウリ出セリ、元蚕飼ニハ木曾川兩岸ノ村々土宜ニカナヘリト土人イヘリ」とある。

大口町の主な村では、余野村は「此村ハ畑多クシテ薄地ニハ茶圃入交レリ(中略)、砂地ナレハ大麦ハ実ラズ、茶桑ノ間ニ多ク小麦荏モ栽ルトナリ、桑葉ハ蚕葉ノ比他村ヘウリツカワセリ」、小口村は「支邑ノ内竹田下島野田野アタリハ砂地ニテ茶圃多シ」の記述がある。河北村・大屋敷村・外坪村・御供所村・長桜村には養蚕関係の記述がない。大口町域は中心部を五条川が北から南に貫流し、東部の村は木津用水の水利もあり水田が多かった。新田開発も多く新田村が10ヶ村もあった。畑地には野菜・菜種・荏胡・茶が栽培され、桑畑は扶桑町と隣接する村に限られていた<sup>14)</sup>。私の祖母の在所は、五条川沿いの大屋敷村高橋の米作農家であった。

『尾張徇行記』にみる扶桑町域の主な村の戸数、人口を示すと、次のようである。柏森

村一戸数165戸、人口704人、齊藤村—135戸、594人、高木村—58戸、273人、南山名村—165戸、650人、北山名村—212戸、861人、下野村—267戸、1227人であった<sup>15)</sup>。また、大口町域の主な村の戸数、人口は、余野村—132戸、520人、小口村—474戸、941人、河北村—85戸、356人、大屋敷村—137戸、538人、外坪村—68戸、201人、御供所村—142戸、583人である<sup>16)</sup>。扶桑町と大口町の田畑面積は、扶桑町9ヶ村の田面積62町7反4畝、畑面積2341町6反6畝23歩であったが、大口町13ヶ村の田面積432町4反余、畑面積225町9反余であった<sup>17)</sup>。

## 2 江南市の寺子屋の設立状況と教育

愛知県の寺子屋に関する基本資料は、1 文部省『日本教育史資料』八（1892〈明治25〉年）、2 愛知県教育会『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』（1931〈昭和6〉年）、3 愛知県教育委員会編『愛知県教育史（古代・中世・近世編）別冊 愛知県寺子屋一覧』（1973〈昭和48〉年）の3つである<sup>18)</sup>。1は文部省が1876（明治16）年から全国の各府県に調査を命じ、1892年に刊行したものである。江戸時代の教育機関の全国調査で寺子屋研究では基本資料である。2は愛知県教育会が県下の小学校に依頼して校区の寺子屋を調べたものである（以下1931年調査とする）。先にあげた丹羽健夫の研究は小学校からの調査回答を分析したものであった。3は戦後に愛知県教育史編纂に際して、1と2の調査でもれた寺子屋を発掘したものである（以下1973年調査とする）。

### (1) 江南市の寺子屋の概要

江南市の寺子屋に関して、旧丹羽郡の古知野町・布袋町と旧葉栗郡の草井町・宮田町に分けて見ていく。『江南市史』資料2文献編（1977年）及び『江南市史』資料編5近現代編（1988年）に寺子屋表を掲載しているが、両者には若干異同がある。ここでは1988年本の寺子屋表をもとに検討する。『江南市史』本文編の近世第6章には、主な寺子屋師匠の略歴、寺子屋経営、就学率に言及しているが、寺子屋表は掲載していない。

『江南市史』1988年本の寺子屋表は、3の『愛知県寺子屋一覧』1973年調査に依拠したものである。しかし、東野村の尾関半兵衛、山尻村の山田天沢、宮田村の曼荼羅寺の世尊院、慈光院の4つの寺子屋を新たにつけ加えているが、赤童子村の渡辺某と尾崎村の杉本良策（1973年調査も省略）の2か所の寺子屋を省いている。身分の記載は1973年調査の「平民」をすべて「農」と記載している。また、開業年・廃業年、生徒数にかなりの異同がみられる。1931年調査でも1973年調査でも、伝承や聞き取り調査が中心なので誤記載がおきやすかったと推測される。さらに、この時期には師匠が名前を何回か変えていることもあり、師匠名が確定しにくい。また寺子屋生徒数も単年度か継年度か不明で、数値の確定は困難だ。表1は、『江南市史』1988年本の表を基礎にして、1・2・3の資料を補筆して修正したものである（番号は便宜的に付した、以下の寺子屋表も同じ<sup>19)</sup>）。

表1 江南市の寺子屋一覧表

(○印=『日本教育史資料』八 △印=『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』1931年調査)

師匠名	身分	所在地	生徒数	学科	開業	廃業	備考
〈古知野町域〉							
1 古池鉞藏 <small>えつぞう</small>	農	古知野村	男80女5	読・書・算	万延元	明治7	○ △
2 堀尾庄兵衛	同	北野村	男40女5	読・書	天保5	明治7	○ △
堀尾善兵衛	同	同	男20	書	明治7	明治8	△
3 寺沢仲右衛門	同	宮後村	男30	同	安政初	明治8	○
4 吉田善助	同	前野村	男30	同	明治初	*善助が本家	○
5 吉田伊右衛門	同	同	男20女	読・書・算		明治初	*吉田分家 △
*吉田文右衛門、吉田茂平も師匠							
6 今井恵海	僧(法印)	赤童子村	男30女5	*長幡寺、3代続く師匠			△
7 渡辺 某		同					
8 古田忠助	農	北高屋村	男40	書	文久期	明治7	*弘中恒庵も ○ △
9 瀧 松左衛門	同	同	男30	同		*吉田忠助の弟子	○
10 大嶽義剛	僧	高屋村				*永正寺	
11 杉浦庄三郎	農	江森村	男20	同	安政5	明治8	○
12 大脇源吾	同	和田勝佐村	男25	同	天保期	明治2頃	△
13 早川栄蔵	同	同	男20女5	同	嘉永期	明治6	○ △
14 大脇金之右衛門	同	同	男15	同	天保期	明治初	○
15 大脇弥左衛門	同	同	男20女5	同	弘化期	明治5頃	△
16 十王堂	僧	同					
17 山田新三郎	農	山尻村	男30女5	読・書	天保5	明治3	△
18 山田天沢	僧	同	男40	書		明治初	*地藏堂
19 尾関半兵衛	農	東野村				明治6	
20 中村八郎右衛門	同	上奈良村	男40	書		明治3	○
21 尾崎銀三郎	同	同	男30女10	同		明治3	△
22 杉本良策	農	尾崎村	男3・40女5・6	同			△
〈布袋町域〉							
23 暮石普門	僧	小折村	男70	読(漢)・書	慶応期		○
24 道明	僧	同	男20女5	書	天保期	明治5	*松岩寺
25 生駒円之	僧	同	男50	読(漢)・書	明治初	明治5	*般若寺
26 村上鉄城	農	同	男30	同	明治初	明治5	*鉄蔵 ○
27 中山新吾	同	曾本村	男30	同	明治初	明治7	○
28 大矢要助	同	寄木村	男35	読・書	天保期	明治5	○ △
29 前田重右衛門	同	安良村	男30	書		明治5	○ △
30 川崎善三郎	同	同	同			明治5	△
31 石田養助	同	今市場村	男15	同		明治7	*源助 ○ △
32 全英	僧	五明村	男45	同	慶応期	明治6	*道音寺
33 野々部貞照	尼僧	東大海道村	男70女20	読・書・算	*釈迦堂	曼荼羅寺末寺	△
〈草井村域〉							
34 伊神和七	農	草井村	男30	書	安政期	明治7	○

35山田天沢	僧	同	男97	同	安政期	明治5	○
36平手諦道	僧	小椋村	男57	同	安政期	明治6	○
37長谷仁兵衛	農	同	男23	同	文政期	元治期	○△
38前田金左衛門	同	同	男28	同	宝永期	正徳期	○
39大竹安之右門	医	村久野村	男40	同	文政期	明治5	*子一忠○△
40竹林順道	僧	同	男50	同	安政期	明治6	*音楽寺、準堂○
41高橋佑瑞	同	同	読・書・算		文久期	明治5	
42広井某	農	同			*後飛保村より移住、有隣舎出身		△
〈宮田町域〉							
42栗本文太郎	医	宮田村	男40女10	書	嘉永期	安政6	△
44三輪貞二	同(眼医)	同	男16	同	安政元	明治12	*三輪氏一代限△
45栗本兵助	農	同	男40女5	同	文久期	明治6	*子三平も△
46尾関兵左衛門	同	同	男20	同	安政5	明治初	○
47小沢定七	同	同	男175	読・書	文久期	明治6	○△
48栗本佐平	同	同	男50	書	安政期	明治11	*京井軒○
49長谷川清	僧	前飛保村	男30	同	慶応期	明治6	*本誓院○△
50小出順了	同	同	男30	同	安政期	*常照院	○△
51世尊院	同	同					
52慈光院	同	同					
53堀場幸右衛門	農	後飛保村	男30	読・書・算	慶応元	明治初	*有隣舎○△
54伊藤喜左(ママ右)	衛	同	男20	書	文久2	明治	○△
55伊藤但馬	同	松竹村	男40	同	嘉永2		○△
伊藤縫吉		同	男40女3	同	明治6		○
56大宝院鶴山	僧	同	男25	同	文化14	天保3	

(注1) 18と35山田天沢は同一人物で草井村文永寺12世住職、隠居後山尻村・前野村に教えに向いた(『くさの井史』1979年)。55伊藤縫吉は1931調査に縫吾とある。

(注2) 19東野村尾関半兵衛の寺子屋が、1931年調査・1973年調査とも記載されていない。東野村はこの地域の屈指の綿織物・絹織物の生産地で、呉服商人として名古屋に進出する村民も多く出ていた。代々の滝兵右衛門家があり、滝信四郎が大正末年に滝文庫から滝実業学校を創立し、尾北の地に最初の実業学校を作った。

## (2) 1931年調査からみた江南市の寺子屋の束脩・謝儀

1931年調査には、古知野町の古知野南尋常高等小学校では古池鉞藏<sup>えつぞう</sup>・堀尾庄兵衛・杉本良策・長幡寺の4人、古知野東尋常高等小学校では古田忠助・吉田柳右衛門の2人、古知野北尋常高等小学校では大脇弥左衛門・早川栄藏・山田新三郎の3人、古知野西尋常高等小学校では尾関銀三郎・中村八郎右衛門の2人の計11人の師匠の寺子屋の詳細が報告されている。布袋町では、布袋尋常高等小学校はなぜか調査回答書を提出していない(旧丹羽郡下31校中で同校のみ未提出)<sup>20)</sup>。布袋尋常小学校は大矢要助・川崎善三郎・前田重右衛門・石田源助・野々部貞照の5人の寺子屋が報告されている。

江南市域の寺子屋の師匠の身分は、『江南市史』本文編によれば、平民34人(64.1%)、僧侶16人(30.2%)、医者3人(5.7%)としている。丹羽郡全体では、平民114人(44%)、

僧侶64人(24.7%)、医者23人(8.9%)、武士15人(5.8%)、神官13人(5%)その他・不明30人(11.6%)であった。平民の身分では、市域に商人は無く農民だけで、師匠は庄屋や隠居した庄屋が務めた<sup>21)</sup>。

教科では大半の寺子屋で文字の習得に時間が費やされたようで、御家流<sup>おいえりゅう</sup>の習字が中心であった。ひらがなから「村尽(村付)」・「国尽(国付)」と進んでいった。読みでは、儒学の基本の「孝経」・「四書五経」<sup>ししよごきょう</sup>が基礎とされた。算術は珠算(算盤)<sup>そろばん</sup>を市街地の寺子屋で教えただけ、表2には古知野村の古池鉞藏<sup>えつぞう</sup>・前野村の吉田伊右衛門・後飛保村の堀場幸右衛門ぐらいであった。しかし、夜間に学びたい生徒を集めて教える寺子屋もあり、四則計算からさらに発展した算術を教えたところもあった。

1931年調査によれば、古知野南校4校の東脩・謝儀は、いずれも「盆正月に1朱又は2朱」、すべて金納でしかも同額であった。古知野東校2校は「毎年5度(節句・盆正月)百文宛、畑作物」と金納と物納の両方、古知野北校3校は「入学時赤飯持参、塾生に筆紙、毎年5節句に赤飯・菱餅・鏡餅を御礼に持参」で物納であった。古知野西校は2校とも、「平生畑で取れた物を持参、盆・正月には天保銭7~5枚を持参」とあり、金納と物納の両方であった。布袋尋校5校は「5節句に少々宛、尚盆・正月も少々宛」とあり詳細はわからない。

草井・宮田地域に関して、草井校は記載がなく不明だが、宮田校ではその詳細がわかる。栗本文太郎の寺子屋は「年2回天保銭1枚又ハ百文位」で、盆・正月に金納している。栗本兵助の所は、「年2回で七夕・正月に、進物少々」と書かれ、金納か物納か判断しにくい物納であろう。伊藤但馬の所は「正月・盆の2回、家で取れる物」とあり物納である。曼荼羅寺の2院は不明。堀場幸右衛門の寺子屋は、「初午<sup>はつうま</sup>に師匠へ菓子持参、3月節句に菱切形の餅3切、旧正月にお飾餅3つ」とあり物納であるが、お祝いの餅・菓子の持参だけであつたらうか。小沢定七は「半期に1朱宛」を受け取っているの、年間2朱の金納である。三輪貞二への東脩・謝儀は「寺上りに進物少々」とあつて物納である。面白いのは「主に朋輩<sup>ほうはい</sup>へ盆・暮に豆腐<sup>とうふ</sup>5丁と紙1帖位」を送るとあつて、豆腐と紙をさし出している。自家製の豆腐及び貴重品であつた紙を寺子屋の先輩や仲間へ送っていることである。

このように謝儀を出す時期は、だいたい盆・正月の年2回であり、金銭では具体的な金額を明示しているところでは2~3朱程度、天保銭5~7枚(500~700文)などが多い。天保銭5枚=500文=約1朱と換算される。古知野村の各寺子屋では、年5度100文を相場として金納で納めたようである。名古屋の城下町の寺子屋のように、生徒数と金額からみて専業に出来るようなところはなかった。『江南市史』に江戸時代の幕末では「月1両ほどの生活費が必要」(430頁)とあつて、幕末の貨幣相場は米1俵=5斗=75kgがほぼ1両で購入できたらしい。当時の「両・分・朱」は4進法なので1両=4分、1分=4朱であった。1両は16朱となる。月16朱なければ1俵の米が買えないし、年間12両がない

と米が買えないことになる。現在の米価格に換算して、丹羽は1両が5万円位と推定している（『愛知の寺子屋』43頁）。

### 3 江南市の小学校の設立・開校

#### (1) 江南市域の町村の変遷

江南市の町村の沿革を概観しておく。江戸時代からの村々は、1889（明治22）年10月の町村制により、古知野町地域では豊原村・東野村・和勝村・旭村・秋津村と古知野村・両高屋村（明治11年）の7ヶ村が成立した。その後豊原・東野の両村が1893（明治26）年11月に合併し東野村になり、1896（明治29）年11月に古知野村は町制施行し、古知野町となった。日露戦争後の1906（明治39）年5月1日に東野村・和勝村・旭村・両高屋村・秋津村・古知野町の1町5ヶ村が合併して古知野町となる。布袋町域では町村制により1889（明治22）年に曾本村・小折村・秋津村（一部）・栄村の4ヶ村が成立している。1894（明治27）年11月に小折村は布袋村に改称、1906（明治39）年5月1日に布袋町となり町制に移行した。

旧葉栗郡の草井村は、1889（明治22）年10月の町村制で草井村・鹿子島村・小杖村が合併し小草鹿村と村久野村が出来た。1895（明治28）年9月に小草鹿村は草井村と小鹿村に分離、1906（明治39）年5月に3村が統合して草井村となる。宮田村は町村制により松竹村・前飛保村・後飛保村3村合併で飛保村ができ、宮田村と2村が統合して1906年5月に宮田村となる。1924（大正13）年12月に町制を施行した。

旧丹羽郡の古知野町と布袋町と旧葉栗郡の草井村・宮田町の3町1村が合併したのは、1954（昭和29）年6月1日である。いわゆる戦後の昭和合併で江南市が成立した<sup>22)</sup>。

#### (2) 江南市の寺子屋から小学校の設立・開校へ

幕末期から明治初期にかけての尾張北部地域の商品経済の浸透と貨幣経済の普及が、天保期以降の爆発的な民衆の教育要求となり、多数の村々で寺子屋が開設されていった。民衆の教育機関の普及と展開が、明治維新後の小学校の設立・開校を円滑に進めることができたのである。廃藩置県後の名古屋県から愛知県への立県の草創期に、「義校」設置の政策が採られた。村で維持・管理する公的<sup>ざんし</sup>学校ではあるが、寺子屋の残滓を色濃く残したもので、1872（明治5）年8月の「学制」により政府は小学校の設置を推進して、義校を廃止させていく。ここでは、明治初期の小学校の設立・開校を『文部省年報』第2年報から第5年報（1874～77年）の資料から、教員数・生徒数・校名の変遷を追ってみる。以下に、表2旧古知野町・旧布袋町の小学校設立と表3旧草井村・旧宮田町の小学校設立を掲げる<sup>23)</sup>。

明治7年から10年の江南市域の小学校は、寺子屋の教育体制とは異なる特徴を持っている。第1には、小学校には女子生徒が多く就学してきたことである。寺子屋ではほとん

表2 明治7～10年の旧古知野町・布袋町の小学校——教員数・生徒数他

	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
和斉学校 (和田勝佐村)	男2	男167女50	男1	男86女32	男1	男79女19	男1	男67女11
尚古学校 (赤童子村)	松枝義平		校舎寺院借用		校名和勝学校・寺院		教場5	
種徳学校 (高屋村)	男3	男83女50	男3	男92女11	男2	男38女5		
東明学校 (東野村)	平田銃之助		寺院		校名赤童子学校・寺院			
古知野学校 (古知野村)	男2	男96女30	男2	男95女17	男2	男105女30	男3	男116女24
応化学校 (中奈良村)	伊藤東左衛門		寺院		校名高屋学校・寺院		教場3	
前野学校 (前野村)	男2	男115女51	男2	男83女21	男2	男151女58	男2	男73女9
緝熙学校 (小折村)	谷 鉞太郎		民家		校名東野学校・新築		教場3	
啓明学校 (小折村)					男1	男52女15	男2	男53女24
					明9創立・新築		教場6	
	男1	男67女17	男2	男110女35	男2	男82女11	男1	男50女8
	伊藤東左衛門		寺院		校名奈良学校・新築		教場3	
							男1	男44女15
							明10創立・教場3	
	男3	男73女30	男2	男108女28	男4	男65女32	男3	男65女32
	伊藤藤左衛門		民家		校名布袋野学校・新築		教場6	
	男3	男93女8	男2	男80女11	男2	男47女11	男1	男58女14
	佐橋嘉一郎		民家		校名小折学校・新築		教場2	

(『文部省年報』第2～第5年報 1874～77年)

\* 明治6年創立——(古知野)10月11日(10/11と表記、以下同じ)和斉学校・10/11尚古学校・10/16種徳学校・10/1東明学校・10/5応化学校、(布袋)10/7緝熙学校・10/8啓明学校。明治9年に校名変更——和勝・赤童子・高屋・東野・布袋野・小折

\*\* 明治7年の人名は「主者」とあり、戸長が学校幹事となり小学校の管理をした。

ど男子であったが、小学校には女子生徒が増えている。男子生徒数の増大も著しく上昇をしており、男女とも生徒数が増大しているが、女子生徒の就学が目立っている。愛知県の寺子屋は、江戸や京阪神の地域に比して女師匠も少なく、女子生徒は大変少なかった。小学校の設立・開校は女子の学習機会を大きく広げたのである。

第2には義校の開校政策とかかわって、校舎・教場の面で寺院借用が多く、新築が少ない。江南市域で明治6年創立の校舎は次のとおり。和斉校(不明)・尚古校(長幡寺)・種徳校(永正寺)・東明校(明7新築)・応化校(善光寺堂)・緝熙校(松岩寺)・啓明校(般若寺)・小草鹿校(麿寺)・村雲校(音楽寺)・研尋校(不明)・宮田学校(川島神社)。

第3には小学校教員について、小学校の設立で教員は複数が多くなった。寺子屋は1人の師匠が多数の子どもを相手に個別教授で教えていた。小学校は多数の生徒が就学したので、複数の教師が一斉教授で教えるようになった。しかしながら、正規の教則(正則)を教えられる教員はほとんどおらず、開校当初の教員は量質とも不足の状況であった。

表3 明治7～10年の葉栗郡旧草井村・旧宮田村の小学校——教員数・生徒数

	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
〈草井村〉								
小草鹿学校 (草井村)	男1 松枝義平	男71女29	男1 旧寺院	男55女8	男2 明9草井学校(小鹿分離)	男54女8	男1 教場5	男63女13
小鹿学校 (小萩村)					男1 明9小鹿学校・寺院	男63女7	男2 教場5	男61女9
村雲学校 (村久野村)	男2 松枝義平	男72女8	男2 寺院	男93女4	男1 校名村久野学校・寺院	男56女1	男1 教場4	男53女5
〈宮田村〉								
蒙求学校 (松竹村)	男2 大野鶴太郎	男78女22	男2 校名研尋学校・新築	男81女23	男3 校名松竹学校	男103女15	男1 教場5	男119女32
春牛学校 (宮田村)	男3 八橋敬忠	男68女32	男3 校名宮田学校・民家	男105女45	男2 民家借用	男109女38	男2 教場5	男60女17
後飛保学校 (後飛保村)					男1 明9創立・民家	男50女1	男1 教場4	男46女4
前飛保校 (前飛保村)							男1 明10創立・教場3	男43女13

〔文部省年報〕第2～5年報 1874～77年)

\* 明治6年創立——〈旧草井村〉小草鹿学校（後草井学校と小鹿学校に分離）・村雲学校（後村久野学校）、〈旧宮田村〉蒙求学校（後研尋学校、松竹学校と変更）・春牛学校（後宮田学校）。明治9年創立——〈旧草井村〉小鹿学校、〈旧宮田村〉後飛保学校、明治10年創立〈宮田〉前飛保学校。

\* 明治7年の「研尋学校・村雲学校・宮田学校・小草鹿学校」の教員数と生徒数は、「明治7年11月小学校積立金並生徒就学不就学人員調」（愛知県庁文書）の数値と若干異なる（『くさの井史』1979年16頁）。また、「明治7年11月各小学校学費出納帳留」愛知県庁文書（『江南市史』資料編5近現代編）の数値とも異なっている。2つの愛知県庁文書は、ともに就学生徒数を、文部省年報は在籍生徒数を示している、と考えられる。

#### 4 扶桑町の寺子屋の設立状況と小学校の開校

##### (1) 扶桑町の寺子屋の設立と概要

『扶桑町史』上（1998年）は寺子屋私塾一覧に掲載して、22校の寺子屋をあげている。1973年調査をそのまま引用しているが、犬山羽根村（南屋敷）の覚王寺を省いている。覚王寺は下野村（のち高雄村）にも同一名寺院があるので、重複として省いたかもしれない。扶桑町の寺子屋は、文部省の1892（明治25）年本では6校のみ、1931年調査は扶桑尋常高等小学校9校、高雄尋常高等小学校10校、山名尋常高等小学校1校の合計20校を数えている。1973年調査は1931年調査の記載をそのまま掲載しているが、ここでは補筆修正して、表4に扶桑町の寺子屋一覧を示す（○印は『日本教育史資料』八に掲載）<sup>24)</sup>。

1931年調査では、扶桑尋常高等小学校の9つの寺子屋は同一書式で、生徒数の数値のみが異なっている。寺子屋の沿革及び変遷は、「生活に困窮したる浪士、多少学問に志ある人々が請われるままに、近隣の子弟を集めて読み書きを授けたるに始まる。その教えを受けたる者は、村の上中流の子弟に限られる。師弟の情理の密なる今日の比にあらず」と

表4 扶桑町の寺子屋一覧表（○印『日本教育史資料』八、△印1931年調査）

師匠名	身分	所在地	生徒数	学科	開業	廃業	束脩・謝儀	備考
1 兼松治郎左衛門	士	柏森村	男50・60	読・書			* 治左衛門？	△
2 亀井弥兵衛	庄屋・農	同	同	同				△
3 鈴井三右衛門	農	同	同	同				△
4 亀井佐七	同	同	同	同				△
5 沢木彦九郎	同	同	同	同				○ △
6 兼松正幹	同	同	同	同				○ △
7 唐井金三郎	同	斎藤村	男30	同				○ △
8 近藤五右衛門	同	同	同	同				○ △
9 沢木秀吾	同	高木村	男5・6	同				○ △
10 牧野弥三郎	庄屋・農	高雄字犬山羽根	男30	読・書・算	文久期	5・6年間		△
11 沢木栄助	農	高雄字東川	男15～20	算(珠算)		維新後に廃業		△
12 高木友雄	庄屋・農	高雄字羽根	男20	読・書		廃業—長州征伐の際		△
13 宮田藤三郎	同	高雄字北新田	同	同		廃業—嘉永初年		△
14 万高院	僧	同字羽根	男20位	同		廃業—明治維新		△
15 仙田理平治	農	同字南定松	男26・7	同	文久2・3			△
16 千田清兵衛	庄屋・農	同字北定松	男150？	読・書・算	嘉永期			△
17 千田桂庵	医	同字南定松	男150	読・書	天保9・10	(嘉永末より15・6年前)		△
18 村瀬讃岐守	神職	同字宮島	男20位	読・書		廃業—維新前迄5・6年前		△
19 国松翁	医	同字北定松	男多数	読・書・随意科・剣道	天保期まで30余年間			△
20 沢木金敬	神職	南山名宮西	男130女2・30	読・書	安政期	明治5年		○ △
21 竜泉寺	僧	山那村						
22 竹二志剛	農	斎藤村						
23 覚王寺	僧	高雄村（高雄南屋敷？）						

書き、「維新後も存在したれども学校の設立と共に次第に閉鎖せられた」とした。入退学は7・8歳より11・2歳までの2～3年間、授業時間は農繁期を除き毎日、朝より日没まで、休業日は正月、盂蘭盆会、5節句などであった。習字の教科書は師匠の直筆（姓・村名・尾張8郡村名・国付・商売往来等）で、読本は師匠の教えた本を読み進め、別に教科書はなかった。算術は加減乗除より開平・開立までの珠算であった。束脩・謝儀に関して、9つの寺子屋はすべて「正月・盂蘭盆会・5節句に餅、土地の野菜類、豆腐2丁、年200文位」としている。豆腐2丁の持参が面白い。

高雄尋常高等小学校でも、束脩・謝儀に関して10校すべてが「盆・正月に1朱ないし2朱位」で同一である。山名尋常高等小学校の沢木金敬の所も、「入学時に赤飯・菓子持参、毎年盆・正月に1朱又は2朱位御礼持参」とある。扶桑町域の束脩・謝儀は、23校中20校が金納と物納及び金納のみであり、謝儀の金納化が進んでいた。束脩に関しては各寺子屋で多少の差違が見られた。16千田清兵衛と17千田桂庵の生徒数男150人とあるが、毎年ではなく通算生徒数かもしれないが不明である。

扶桑町の寺子屋では、読・書を教える所が多数で書（手習）だけは少なかった。10牧

野弥三郎と16千田清兵衛は読・書・算の3科を教え、算術は「八算・見ノ段・相場割・旧積・開平・開立」を教えた。11沢木栄助の寺子屋は珍しく算(珠算)のみを教えている。また、17千田桂庵(医)は夜学の部(17・8~25歳)を開き、有志には算術を教えた。

扶桑町の寺子屋の設立は、1931年調査の20校が基本で、戦後の1973年調査で4校(斉藤村の竹二志剛、下野村と下野村南屋敷の2つの覚王寺、山那村の竜泉寺)が加えられ24校とされた。『扶桑町史』上は、覚王寺を高雄村(元下野)だけとして23校から1校減の22校とした。扶桑町の23校の寺子屋は、盆・正月に1朱か2朱を持参しており、金納化がもっとも進んでいた地域であるといえる。

## (2) 扶桑町の小学校設立・開校

扶桑町域の小学校設立・開校は、明治6年に10月5日創立の顕誠学校(下野村覚王寺)と啓明学校(山那村東漸庵)に始まり、同月16日創立の郁文学学校(柏森村専修院)と涵養学校(南山名村沢木家)の4校と江南市の和田勝佐村と斉藤村が設立した和勝学校(十王寺・10月11日創立)である(『府県資料教育』第13巻愛知県史料 1986年)。『文部省年報』第2~5年報(明治7~10年)の愛知県小学校表から、以下の表5扶桑町の小学校の教員数、生徒数、校舎・教場の変遷が明らかとなる<sup>25)</sup>。

表5 明治7~10年の扶桑町の小学校——教員数・生徒数他

	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
顕誠学校 (下野村)	男2	男147女50	男3	男91女20	男3	男136女27	男2	男110女10
啓明学校 (北山名村)	男2	男72女20	男1	男90女10	男1	男67女24	男1	男81女5
郁文学学校 (柏森村)	男2	男363女51	男3	男128女20	男4	男172女50	男2	男53女12
涵養学校 (南山名村)	男2	男84女30	男1	男61女30	男2	男106女22	男2	男101女19
上野学校 (上野村)					男1	男38女10	男2	男30女4
斉藤学校 (斉藤村)					男1	男52女2	男1	男41女2

(『文部省年報』第2~第5年報 1874~77年)

〈扶桑町〉明治6年創立——顕誠学校・啓明学校・郁文学学校・涵養学校。明治9年創立——上野学校・斉藤学校。明治9年に校名変更——高雄学校・北山那学校・柏森学校・南山名学校

扶桑町の義校は、『愛知県教育史』資料編近代1(1989年)に関連記事がある。1872(明治5)年7月の義校周旋人として丹羽郡では、稲置村堀野留兵衛、西大海道村鈴木万兵衛、小折村村瀬尋左衛門、今市場村石田養助の4名がいる。また、同年8月の「義校開

設に付愛知県へ伺」には、「各区村々<sup>りせいえしゅうせん</sup>里正江周旋人<sup>じゆくだん</sup>より熟談」して、従来の寺子屋から「筆道算術師等義校開業之上ハ模（ママ最）寄義校江右門生召連出頭いたし候」のご布告を出してほしいとの資料がある。これまでの私塾寺子屋師匠に義校を開校させ、寺子を義校生徒に召し出すとするものである。このなかに「義学校開業処見立」には丹羽郡の義校開設所として「小折村・西大海道村・○稲置村・○楽田村・○柏森村・岩倉村（○印義校既に開）」をあげている。これによれば、柏森村<sup>せんしゅういん</sup>専修院は明治5年8月に義校として開校していた<sup>26</sup>）。義校が寺子屋形態をそのまま継承して学校とする方向であったことを示している。

しかし、明治5年8月の「学制」による明治政府の方針は寺子屋と断絶させ、小学校を新たな理念に基づき設立・開校しようとした。愛知県に対して義校を廃止させ小学校に転換させていった。上記の表5は、新規開校させた小学校の明治7年から10年までの学事統計である。柏森村の郁<sup>いくぶん</sup>文学校は、明治7年の生徒数414人で近隣の村々の学校と比べて多くの生徒が就学していた。義校としていち早くスタートしていたからかもしれない。

明治6年創立の4校は男子生徒の就学数がきわめて増大している。さらに明治7年の女子生徒は顕誠学校50人・郁文学校50人、涵養30人、啓明20人で近隣村落と比して多数であった。明治8年から減少するとはいえ女子生徒の就学率は高いといえる。

扶桑町域の村の変遷では、1875（明治8）年6月に岩手村・北山名村が統合して山名村になり、1889（明治22）年10月には南山名村も合併で山名村となる。1878（明治11）年12月28日に下野村・下野原村・犬山羽根村の3村合併で、高雄村が成立している。1889年の町村制施行で高木村・斉藤村が合併して、豊<sup>とよくに</sup>国村が成立している。1906（明治39）年10月1日に柏森村・豊<sup>とよくに</sup>国村・高雄村・山名村の4村合併で扶桑村となり、木津・上野が犬山町に、余野が大口村に編入された（余野は1895年に柏森に合併していた）。1907（明治40）年10月に扶桑第1尋常高等小学校（高等科全村、尋常科柏森・斉藤・高木）、扶桑第2尋常小学校（高雄・のち高雄尋常小）、扶桑第3尋常小学校（山名・のち山名尋常小）が成立した。戦後の1952（昭和27）年8月1日に扶桑町になった<sup>27</sup>）。

## 5 大口町の寺子屋の設立状況と小学校の開校

### (1) 大口町域の寺子屋の設立と概要

大口町域の寺子屋について、『大口町史』（1982年）は19校をあげている。『日本教育史資料』八（1892年）では、12校（小口村4校・豊田村2校・河北村2校・外坪村2校・大屋敷<sup>おやしき</sup>村1校・秋田村1校）であった。1931年調査は大口第1尋常高等小学校7校、大口第2尋常高等小学校13校の合計20校の寺子屋があがっており、1973年調査は29校となっている。表6の大口町の寺子屋一覧表は、1973年調査を基にして1892年本と1931年調査の寺子屋を修正・加筆したものである<sup>28</sup>）。

表6 大口町の寺子屋一覧表

(○印は1892年本、△印は1931年調査の寺子屋、□印は『大口町史』1982年)

師匠名	身分	所在地	生徒数	学科	開業	廃業	備考
1 佐竹浅右衛門	平民・農	秋田村	男40	読書	嘉永5	明治初	○△□
2 鈴木甚三郎	同	同	男5女1	書	安政2	明治初	△□
3 金毘羅堂	僧	同				*明治10秋田学校	
4 社本繁之助	同	御供所村	男40	同	明治4	明治5	○
5 社本眞(ママ新)	兵衛	同	男30	同	文久2	明治5	○△□
6 曾隣・桂林寺	僧	同	男30女2	書・算		明治9	△□
7 江口早右衛門		同	男20	読・書	安政期	慶応2	△□
8 丹羽三九郎	平民・農	大屋敷村	男40	読・書	文久2	明治5	*五九郎 ○△□
9 三輪和吉	同	同	算				
10 前田繁左衛門	同	同	男16女3	書	元治元	明治10	*長松寺 △□
11 河井重兵衛	同	外坪村	男13	同			○
12 舟橋 渡	同	同	男15	読・書・算	文久期	明治5	○△□
13 本光寺	僧	同(杉山)	同				
14 仙田清六	同	河北村	男18女6	書			*仙田塾 ○△
15 水野田左衛門		同					*号は佳一 □
16 花橋春溪	平民・農	同	男20	同			○
17 妙智庵	僧	同					
18 伊藤甚右衛門	平民・農	余野村	男12・3	同	文久期	明治初	△□
19 倉地越寿	士	同	男30		明治初	*忠之(神官)も師匠	△□
20 倉地久三郎	同	同					
21 伊藤松兵衛	同	同					△□
22 吉田平三郎	平民・農	同	男15	書・算	慶応頃	明治初	△□
23 成瀬成麿	士	同(寺前)	男35	書	明治初	明治8	*徳林寺 △
24 寺沢丸平	同	小口村	男10	同	明治初	明治7	
25 織田高堂	僧	同				明治5	*妙徳寺
26 宮地喜間多	平民・農	同	男16	同	天保8	明治22	*高次 ○□
27 倉地武雄	神官	同	男30	同	慶応期	明治10	○△□
28 大塚重兵衛	平民・農	同	男15	読・書	嘉永元	明治初	○△□
29 本光寺	僧	竹田村	読・書・算			明治初	*真言宗僧 △□
30 山田兵馬	神官	小口村	男14.5	読・書			*山伏 △□
31 酒井唯一		下小口	男25	読・書			△□

1931年調査の大口第1尋常高等小学校、大口第2尋常高等小学校では両校とも7枚で、各寺子屋が詳しく書かれている。大口第1校では1寺子屋1枚で回答用紙を提出した。東脩・謝儀から見ていこう。1佐竹浅右衛門(秋田村)で「盆暮正月に有志者のみに簡単な品物(食物・衣類)を贈る、謝礼をせぬ者多し」とある。2鈴木甚三郎では「盆には素<sup>そう</sup>麵、正月には砂糖」、7江口早右衛門では「時々食物を持参」であった。代々寺子屋を続けた5曾隣(桂林寺)は「5節句毎に金1朱と麦粉少量」、8丹羽三九郎は「天保銭1文或は2文」、10前田繁左衛門は「正月餅持参、盆金3朱程」とあって金納もかなり行われ

ていた。大口第2校の大塚重兵衛は「5節句・盆・正月に持参」とだけであり、26宮地高次と31酒井唯一は「5節句に2朱」、余野村の18伊藤甚右衛門・19倉地越寿・忠之・22吉田平三郎・23成瀬成麿の4つの寺子屋は「5節句に物品、盆・正月に金200文」であった。大口町では東脩・謝儀は寺子屋によって多様な形態を取っていた。

大口町の寺子屋の特徴として、近隣の農村には珍しく士族の師匠がいる。いずれも犬山藩士で余野村4人、小口村1人の5人を数えている。ユニークな師匠もいた。小口村の師匠山田兵馬は、福止院という山伏の家にて兵馬の先代頃より寺子屋を開業、兵馬は神職となり寺子屋の跡をついだとある。さらに小口小学校開校と共に廃校されるが、寺沢九平方にて私塾を開き「学校に入らざるものを教授せり」とある。毎月25日の天神講は、多くの寺子屋で熱心に取り組みされた。小口村の倉知土佐守の所では「少々の銭を持寄り、酒及び菓子を買ひ天神経を読み、お供えをいただく」、仙田清六の「鏡銭5文持寄り菓子その他を買って半日遊んだ」とある。2月25日の命日を休日としている所もあった。

## (2) 大口町の小学校の設立・開校

大口町の小学校の開校は、明治6年10月5日に博問学校（小口村妙徳寺）、10月11日に集義学校（御供所村八剣社）、同日に汗明学校（大屋敷村長松寺）の3校である。なお、河北村は扶桑の下野村（のち高雄村）と共に10月5日に顕誠学校（学校位置下野村）を設立した。『大口町史』は明治5年に「博文舎（ママ博問）・集義・顕誠・余野学校」が創立とし、明治8年に「肝銘学校（ママ汗明）」をあげているが、その出典が明らかにされていない。大口町には明治5年段階で義校は1校も開校されていないので誤りであろう。表7に明治7～10年の大口町の小学校の教員数・生徒数等を示す。

表7 明治7～10年の大口町の小学校——教員数・生徒数他

	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
博問学校 （小口村）	男2 高木友雄	男84女26	男2 民家借用	男48女15	男1 校名小口学校・寺院	男58女8	男1 教場3	男58女7
集義学校 （御供所村）	男2 村瀬増右衛門	男84女21	男1 新築	男71女15	男1 校名豊田学校・新築	男66女21	男1 （豊田村）教場5	男47女10
汗明学校 （大屋敷村）	男2 同	男66女28	男1 寺院	男71女15	男1 校名大屋敷学校・寺院	男62女13	男1 教場3	男66女12
余野学校 （余野村）							男1 教場5	男35女4

（『文部省年報』第2～5年報 1874～77年）

（旧大口村）明治6年創立——博問学校・集義学校・汗明学校、明治10年創立——余野学校、明治9年に校名変更——小口学校・豊田学校・大屋敷学校

1874（明治7）年には、博問・集義・汗明の3校は教員2人、生徒数は各校とも男女合計で約100人が就学している。女子の就学生徒が一気に増えて、寺子屋とは大きな差違が

ある。しかし、1875（明治8）年からは汗明学校の男子生徒数が横ばいとなり、女子就学はかえって減少している。博問・集義の両校では男子・女子の生徒数とも激減している。

1931（昭和6）年に愛知県教育会は、『各小学校沿革の調査』を行っている<sup>29)</sup>。先の『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、市学校の調査』と同年に行った調査で、県下の各小学校に学校の沿革史を書いて提出させたものである（愛知県図書館所蔵）。大口第2尋常高等小学校の沿革を、「旧小口村—明治5年学制頒布ニヨリ中小口組ニ小学校博文舎ヲ創設ス妙伝寺ヲ校舎ニ仮用シ全寺住職織田高堂校長タリ」、「旧余野村—明治5年学制頒布ニヨリ学校ヲ建設シ徳林寺ヲ校舎ニ使用セリ」と書いている。しかし、明治5年には「校長」の呼称はまだ制度上出来ていない時期である。『大口町史』の明治5年創立の記載は、1931年の小学校沿革調査を踏襲したものと考えられるが、その正確性に疑問が残る。大口村の小学校創立年及び校名は、ここでは愛知県から文部省に上申された『文部省年報』の各年度の学事資料を採用しておくことにする。

大口町の町村の沿革は、次のようである。1878（明治11）年12月に小口村と清右衛門新田が合併し小口村に、御供所村と4つの新田村（又助・三右衛門・九郎右衛門・小折田）が合併し豊田村に、長桜村と5つの新田村（小折部・長桜替地・宗雲・八左衛門・伝右衛門）が合併し秋田村になり、町村制施行の1892（明治22）年10月1日に余野村・小口村・富成村（河北・外坪の両村合併）・大屋敷村・太田村（豊田・秋田の両村合併）の5ヶ村が成立した。その後、余野村が1895（明治28）年8月に柏森村と合併する。日露戦争後の1906（明治39）年10月1日の町村合併により、余野村・小口村・富成村・大屋敷村・太田村の5村で大口村が成立した。翌1907（明治40）年に、大口第1尋常高等小学校（豊田・秋田・大屋敷）と大口第2尋常高等小学校（小口・外坪・河北・余野）が設立された。前者は、明治21年尋常小学豊田学校から明治23年太田尋常小学校の系譜を引き、後者は明治21年尋常小学小口学校から明治23年小口尋常小学校の系譜を引く学校であった<sup>30)</sup>。なお、大口村から大口町になるのは、1962（昭和37）年4月1日であった。

## 注

- 1) 木全清博「尾張北部の旧丹羽郡の学校史(1)—岩倉市の寺子屋から小学校設立へ—」『名古屋芸術大学研究紀要』第40巻 2019年3月、「北名古屋市（旧師勝町・旧西春町）の寺子屋研究(上)—寺子屋の設立の背景と教育実態—」『名古屋芸術大学教職センター紀要』第8号 2019年3月、「同上(下)」は2020年3月刊行予定。
- 2) 同上「尾張北部の旧丹羽郡丹陽村・西成村（現一宮市）の学校史—寺子屋教育と私塾有隣舎から小学校の設立へ—」『名古屋芸術大学人間発達研究所年報』第8巻 2019年度中刊行予定
- 3) 丹羽健夫『愛知の寺子屋』（風媒社 2012年）
- 4) 『同上書』54頁
- 5) 塚本学・新井喜久夫『愛知県の歴史』（山川出版社 1970年）174～175頁
- 6) 宮田町史編纂委員会『郷土宮田』（1959年）87頁
- 7) 岡田啓・野口道直著・小田切春江画『尾張名所図会』1844（弘化元）年

- 8) 『江南市史』本文編（2001年）378～379頁
- 9) 樋口好古『尾張洵行記』1822（文政5）年
- 10) 『前掲書』注8）表5-1 381頁、原典は『尾張洵行記』「小牧御代官支配所丹羽郡中村邑」である（復刻版1976年）。
- 11) 『江南市史』近世村絵図編 解説書（1994年）183頁
- 12) 『前掲書』注9)
- 13) 『前掲書』注8）383～385頁
- 14) 『同上書』注8）381頁には、扶桑町域・大口町域の村々の養蚕業も記載している。
- 15) 『扶桑町史』上（1998年）279頁
- 16) 『大口町史』（1982年）151頁
- 17) 『前掲書』注15）359頁、注16）215頁、原典は注10）と同じ『尾張洵行記』
- 18) 1 文部省『日本教育史資料』八（1892＝明治25年）、2 愛知県教育会『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』（1931＝昭和6年）、3 愛知県教育委員会『愛知県教育史（古代・中世・近世編）別冊 愛知県寺子屋一覧』（1973＝昭和48年）
- 19) 『江南市史』資料編5 現代編（1988年）を基にして、注18）の1～3を参照して補正した。また、原始・古代から近現代までの草井町域の編年史で、重厚で実証的な郷土史『くさの井史』（1979年）を参照にした。同町史は通常の町史をこえる資料発掘と叙述の書である。『古知野町誌』（1925年）には10校の寺子屋（68～69頁）をあげており、尾崎村杉本良策の寺子屋も記載している。
- 20) 村瀬鼎五郎『町史布袋町大観』（1934年）は8校の寺子屋をあげ（257頁）、布袋町五明区編『五明区史』（1987年）は7校をあげている。
- 21) 『前掲書』注8）表1-15（503頁）
- 22) 愛知県総務部都市計画課『市町村沿革史』（2007年）
- 23) 文部省『文部省年報』第2～第5年報「愛知県公学校表」明治7～10（1873～77）年
- 24) 『前掲書』注15）表4-10 寺子屋私塾一覧（366頁）
- 25) 『前掲書』注23）と同じ。また『前掲書』注15）の記載を参照。
- 26) 『愛知県教育史』第3巻（1973年）86～87頁、『愛知県教育史』資料編近代1（1989年）「47 義校開設につき愛知県へ伺」、「48 義校周旋人人名」（74～75頁）
- 27) 『前掲書』注22)
- 28) 『前掲書』注16）312頁、大口村編『50年の歩み』（1956年）には、寺子屋の記述はなく小学校の変遷のみである。
- 29) 愛知県教育会『各小学校沿革の調査——附教育会、青年団、女子青年団沿革並に社寺数の調査』（1931年）愛知県図書館所蔵資料
- 30) 『前掲書』注22)